

# 行ってみ！チャレンジ 報告書

計画名：大メコン圏の格差問題の実態調査

渡航先：ラオス・ベトナム・ミャンマー

計画開始日：2020年2月17日

計画終了日：2020年3月03日

氏名：中務 真弥

## ■ 渡航概要と目的

私は今回「行ってみ！チャレンジ」を利用し2020年2月17日から3月2日の15日間（コロナウイルスの影響により予定していた便が欠航し前倒して帰国）でラオス、ベトナム、ミャンマーに渡航した。今回私がこの3か国を選択した理由は大きく分けて2つある。

1つ目は自身の研究テーマの深掘りである。私は大学3年次より国際経済学ゼミに所属し、自身の研究地域である東南アジア・大メコン圏地域を主に貿易・投資・産業構造・サプライチェーンの構築等の視点から分析を行ってきた。しかし研究を進めていく中でこの地域は経済発展が目まぐるしく、どれが最新の情報か、正しい情報かを見極めることが非常に困難であることが度々あった。例えば、大メコン圏の中で唯一の先行国であるタイは、一人当たりのGDPを見ても7,187ドル(2018年)と他の4か国よりも突出して高い数値であり、一見発展しているように見えるが、実際に外務省のデータによると未だ就業者の約40%弱が農業従事者であり、工業製品の拠点である東部と農業中心の東北部では約6倍の地域格差があるというデータ(JETRO)も見受けられる。このように、深刻化する格差問題の実態を実際に自分の目で確かめ、偏見や思い込みで物事をとらえないようにするため、大メコン圏に渡航したいと考えた。その中で今回は東南アジアに広がる経済回廊の主要拠点を中心に自身がまだ訪れたことのないラオスのヴィエンチャン(南北経済回廊)、ベトナムのダナン(東西経済回廊)、ミャンマーのヤンゴン(東西経済回廊)、さらに2年前に一度渡航経験があるが2年前の比較としてベトナムの首都であるハノイ(南北経済回廊)へ渡航することを計画した。

2つ目はこのチャレンジを来年度から社会で働くための土台にしたいからである。私は来年度から国際物流に携わる仕事をする予定だ。働く中でいくらパソコンの前に座っていても、これから海外へ輸出される品を眺めていても、実際どのような暮らしの人がその商品を使い、どれだけ農村部にまでいきわたっているのかを知ることは難しいと考える。長期的に海外に行ける今のうちに、まずは自身の研究地域である東南アジア・大メコン圏のインフラ事情、物流事情を少しでも多く理解し、この経験を今後に活かしたいと考えたため「行ってみ！チャレンジ」にチャレンジすることを決めた。

渡航内容としては、メコン圏3か国で様々な分野で活躍される日本人の方9名にインタビュー調査を行い、実際に住んでいる方々の“生の声”を聞くことで、日本との比較はもちろん、どのような生活をされているのか、住み始めてからの生活の変化等を拝聞した。また、経済特区や工業団地、市場に赴きどこの国の外資が参入しているのか、また各国の食文化を探った。

## ■ 渡航先を通じて感じたこと、学んだこと

### ◎ラオス（2/17～2/22）

▷インタビュー調査・現地ガイドに協力してくださった方

・Aさん（匿名希望）

職業：フリーランス 現地移住：2004年～

・Bさん（匿名希望）

職業：レストラン勤務、ラオス国立大在学中 現地移住：2019年～

・松尾岳史さん

職業：フリーランス（番組カメラマン、映像コーディネーター、炭焼き職人（ラオス備長炭）等 現地移住：1984年～（タイ）2007年～（ラオス）

▷訪れた経済特区・工業団地

・サイセッター総合開発区

・VITA PARK

私は初めてラオスへ渡航したが、最初に感じたことは首都ヴィエンチャンだからという理由もあるが、街並みは思っていた以上に発展しているということだ。2004年から自動車の輸入規制が緩和され、多くの中古車がラオスに入ってきた。そして2012年には環境・渋滞等の面から中古車の輸入にストップしたことを皮切りに日本で走っている車と変わらない自動車が増え、多くみられるようになったという。実際に私は今回のラオスへの渡航では大型ショッピングセンターの前に広がる塗装された道路にきれいな自動車ばかりが走っている風景をヴィエンチャンでみた。

しかし、一歩ラオスの生活の中に入るとまだまだ発展途上である部分が多く見受けられた。1つ目は、様々な国から多くの支援を受けているという点だ。隣国である中国はもちろん日本や韓国、オーストラリア等の国々から道路整備や空港、橋、水力発電の建設支援を受けている。しかし、これらの国に鉱山の発掘権利や広大な土地の使用権が着々と奪われているのも現状である。

2つ目に環境問題が挙げられる。前述した大型ショッピングモールを訪れた際、目の前を流れる川が不自然に白くなっていることに驚いた。レストラン勤務をされているBさんによると、現地の人はキッチンの水道に平気で使い終わった油を流しているという。Bさんはそれを止めているというがほとんどの現地の人々がそれをし、生活水がそのまま川に垂れ流しの状態であるから、このように川が汚れ続けているのではないかと教えていただいた。この状況が続けば国を超えての公害問題が深刻化するのではないかと感じた。

最後はインフラ整備である。空港付近や中心部ではアジアハイウェイの支援の影響もあ



り道路が整備され、車通りも多い。しかし、20、30分郊外へ車を走らせるだけで赤土の道路が見受けられ、砂塵が多く飛んでいる。車通りが多くなってからこの砂塵で咳等のアレルギーになる人が多いと伺った。また、私の経験談としてこの4泊5日の中で水道、電気が各1回ずつ止まってしまった。インタビュー調査では、明らかに昔と比べて水道や電気が止まる頻度や時間は減っているという声を聞き、かつラオスは水力発電が主力産業であるが、電力でさえまだ安定していないことを実感した。

私は今回のラオスの調査で、特に“中国”に関することに興味を持った。まず今回の調査で感じたことは、ラオスが中国の踏み台になってしまっているということだ。そのことが鮮明にわかる事例が鉄道計画（中老鐵路）である。ヴィエンチャンでは中国資本の大型ショッピングセンターや経済特区等様々な中国色の強い建物が見受けられた。しかし、中途半端に建設途中のものや全く機能していないものがところどころあった。そんな中、中老鐵路の建設は着実に進んでいるという。これが完成すれば、タイとの国境に繋がるタイ・中国高速鉄道と接続され、そのままバンコク、マレーシア、シンガポールにまでアクセス可能になる。あくまでこの鉄道によって甘い蜜をすえるのは中国であって、ラオスはただ通り過ぎる国に過ぎない。結果、この鉄道によるラオスの経済発展はあまり期待できない。また、経済特区の閑散とした雰囲気から、人口701万人（2018年）とラオスののんびりとした国民性では、従来の工業発展の初期段階である労働集約型産業はやはり難しいと考える。中国の手により、あらゆるものが建設され、収益が見込まれないものは放置され、とんちんと複雑な気持ちになる風景を多く目の当たりにした。



大型ショッピングセンター前の川と閑散とした店内



ラオスラオス友好橋と一日2往復する電車（オーストラリア支援）



サイセッター総合開発区



赤土の道路とその位置情報

## ◎ベトナム (2/22～2/28)

### ▷インタビュー調査・現地ガイドに協力してくださった方

・田口義暢さん

職業：旅行会社（100%ベトナム企業）ボランティア活動、農業等にも従事

現地移住：2008年～

・鈴木麻美さん

職業：ゲストハウス経営（EZSTAY HANOI） 現地移住：2016年～

・カズキさん

職業：レストラン経営（Bread of Life） 現地移住：2019年～

### ▷訪れた経済特区・工業団地

・タンロン工業団地

・クアンミン工業団地

私は2年前に一度ハノイを訪れた経験があるのだが、相変わらずのバイクの多さでラオスから来た私にとっては少々騒がしいと感じたのが第一の印象である。しかし、このバイクの多さも2030年にハノイでバイクが禁止されるにあたり、なくなるのかもしれないと思うと今しか見ることのできない光景なのかと感慨深いと感じたが、この多さで禁止にで



きるのか同時に疑問も生じた。個人的な2年前の比較としては、警察の信号等での取り締まりが気持ち多くなっている気がした。また、車の量が増えていると感じ、実際ラオス同様ベトナムでも自動車が増えていると鈴木さんに教えていただいた。

ラオスでは中国資本が強いと感じたが、ベトナムでは韓国も負けてはいない。サムスンやロッテなどの看板、建物が多く見受けられた。また、後発国のなかで突出して工業化が進むベトナムの工業団地には日本を含む様々な国の労働集約型工場が目に入った。

しかし、急速な発展を遂げているベトナムだがその発展についていけない部分も多いと田口さんという。実際にラオスはベトナムとは違い主要道路は土ではないし、水道や電気もほとんど止まることはなくなってきた。しかし、生活環境はとても悪い。郊外へ行くとあらゆるところにごみが落ち、悪臭が目立つ。田口さんがボランティア活動をはじめるときっかけとなったのが、子供たちが普通に遊ぶ広場にすてられているごみの中から医療廃棄物である使用済みの注射を発見したからだという。また、中国からの偏西風から流れてくる大気汚染や自国のバイクの排気ガス等で中心地の空気はうっすらもやがかかっている。実際に私はハノイについてすぐのどを痛めてしまった。また、ダナンはリゾートとして観光地化されて環境面には力を入れているのだろうと思っていたのだが、切れた電線が平気で歩道に垂れていたり、壊れた歩道がそのままになっているところがあちこちで見られた。このような不十分なインフラ整備や環境被害がでているのも中国や日本もそうであったように工業化が進んでいる証拠になるといえなくもないが、ベトナムが早期に取り組むべき課題であることには変わりない。しかし、余談ではあるがコロナウイルスによる影響で私がハノイに到着したところには学校が休校になっており、休みになって3週間目と伺ったので、そこら辺の決定は社会主義であるから早く決断できるのか、生活環境が充実していないからなのかそうせざる終えなかったのか、と考えさせられた。

富裕層が増加しているのかロッテマートやイオンは十分栄えていると感じ、輸入品である日本の品も数多く取り揃えていた。さらに、ラオスでは娯楽施設がないため人との交流が娯楽となっているとインタビューで教えていただいたのだが、ハノイにあるイオンにはUFO キャッチャーやコインゲーム、ガチャガチャ等のゲームが2階、3階の隅にあり、4階はボーリングやビリヤードで遊べる施設となっていて日本のイオンより娯楽施設のスペースがとても多いと感じた。またあらゆるところにマッサージ機が並んでおり、日本でもよく見かける KUMON やルネサンス等も入っていた。着実に工業化によって生活が豊かになっている層がいるのだと実感した。



日本がディベロッパーであるタンロン工業団地（植え込みまで丁寧に手入れされていた）



ハノイの街の風景



日本がディベロッパーであるタンロン工業団地（植え込みまで丁寧に手入れされていた）



イオンモールロンビエン



左から壊れた道路（ダナン）垂れた電線（ダナン）道端に捨てられたごみ（ハノイ）



## ◎ミャンマー (2/28~3/2)

▷インタビュー調査・現地ガイドに協力して下さった方

・木下陽康さん

職業：企業信用調査 (FWP RESEARCH Co.,Ltd.) 現地移住：2012年～

・白川一城さん

職業：旅行会社 (HIS ヤンゴン支店) 現地移住：2016年～

・近江友介さん

職業：日系企業進出コンサルタント (O.M.I.CORPORATION)、日本語教室

現地移住：1993年～

ミャンマーでは、自身が計画していた予定が狂ってしまい、予定していた日数より短くなってしまったのだが、ミャンマー人と交流する機会を多く設けることができ、ラオス、ベトナムで行った現地調査とはまた違う角度から調査を行うことができた。まず、初めてのミャンマーで人生初めて空港タクシーを利用したのだが、ベトナムに比べて吹っ掛けられず、わからないことを丁寧に教えてくださるとても優しい方であった。白川さんによると、ミャンマーでは徳を積むと来世で多くの幸が得られるという文化が強く根付いていると教えていただいた。実際近年は抜かれてしまったそうだが、ミャンマーは世界寄付指数ランキング4年連続1位であり、自分のためにも人に優しくするというなんとも気持ちのいい文化が定着していると感銘を受けた。私は正直、ロヒンギャ問題や渡航後すぐにお話をさせていただいた木下さんから秘密警察や政治の話等でミャンマーはとて怖い国であると感じていた。しかしたった数日ではあるが、近江さんが行く日本語学校や近江さんのお宅に訪問させていただき、ともに暮らすミャンマー人の妻や姪っ子と接し、怖い面だけではないとても温かいミャンマーの暮らしに触れることができた。

一方で、私は渡航前から日本で得た知識よりミャンマーは地理的優位性や先進国からの制裁の緩和、解除から東南アジアのラストフロンティアとして位置付けてきた。だが、ふたを開けてみると社会主義から民主主義に代わり、まだ土台がしっかりしていないミャンマーで会社を運営していくことは難しいようだ。また、白川さんによると現地の人との信頼関係がうまく築けない日系企業が多く、平均して従業員の7割程度が辞職願を出すケースが多いらしい。実際に白川さんもヤンゴン支店へ赴任してから7.8割の現地従業員から辞職願を出されたという。白川さんの場合は、一人一人と話し合い、自分自身がまず素を見せなければと気づき、そこから従業員との信頼関係を重要視していったという。秘密警察がまだ存在するミャンマーでは、そう簡単に外部から来た人を信じることができないのかもしれないとこのお話を聞いて推測した。会社に伺った時の印象しかないのだが、本当に仲の良い会社であると心から感じ、海外に訪れたときは、自分自身の価値観をそこに押し付けるのではなく、現地の文化や考え方を一生懸命理解する姿勢が重要であると改めて実感した。ほか



にもさまざまな理由があるのだが、前述した理由が一因として日系企業が続々と撤退していると同った。いずれはまた最後のフロンティアとして改めて注目される時が来るかもしれないが、今はまだその時ではないようだ。

ミャンマーを訪れてみて感じたことは、ミャンマーでは日本への関心が非常に高いということだ。日本にいと“ミャンマー”に関するものに出会うことは非常に少ないと感じる。しかし、ミャンマーでは多くの日本語教室を目にし、日本語教室を訪れる生徒も将来日本へ技能実習生として行きたいという声を多く聞いた。現在、ベトナムから多くの技能実習生が来ているように、ミャンマーからの実習生もこれからもっと増えていくのだろうと感じたとともに、どうか日本に来て不当な労働をさせられないようにと一抹の不安も生じた。



左：近江さん宅にて（タナカを作っている妻のティンティンモウさん） 右：日本語教室



日本語教室の生徒とシュエダゴンパゴダ（ティンモウさんにロンジーを仕立てていただきました）



多くの看板の中に“FUJI”や“GINZA”という名の日本語教室が見受けられる

## ■ 今回の経験を今後どのように生かしていくか

私は今回の渡航の経験から特に2つのことを学んだ。

1つ目は改めて、偏見や噂だけで物事をとらえず、実際に自分自身の目で確かめることが重要であるということだ。私は今回はじめてラオスとミャンマーに訪れたのだが、もっと発展が遅れていると勝手に思っていた。また、貧しい＝食べ物に困っているという偏見も無意識に持っていたことにも気づいた。実際、今回訪れた国はすべて食料自給率が100%を超えており、どの地域も最低限の食べ物を得ることができるとインタビュー調査で教えていただき、食料自給率が低く海外に依存してしまっている日本に不安を感じた。日本は一般的に裕福な国ではあるが、食物に関しては非常に貧しい国に分類されることを学んだ。また、ラオスは東南アジアの中で比較的経済格差が小さい国であると日本で得られる数値から考えていたのだが、やはり実際に訪れてみると格差は大きいと感じた。

二つ目は、自分の考え方が当たり前と考えて接するのではなく、いつも柔軟に様々な文化や考え方を吸収していく必要があるということである。ミャンマー在住の方々がかつておっしゃっていたミャンマー進出に苦戦している日系企業が多いという意見をはじめ、ベトナムでお会いした田口さんの、赴任している日本人で多いのが、その国の言語を覚えようとしなかったり、どうしてもその国の大衆食堂を汚そうと毛嫌いするという意見から、どうしても先進国は発展途上の国を下にみってしまう傾向があるのだと感じた。

前述したとおり、私は来年度から国際物流に関する仕事を行う。本当に当たり前のことだが、モノが届く先には様々な人が生活しており、一概にこの国＝裕福、貧しい、この国はこんな国だろう、と自分自身の物差しで測ることはできないことを覚えておきたい。また、先進国は海外に進出できることが当たり前と思うのではなく、相手の国の土地を貸してもらっているという考え方を忘れず、相手の国への思いやり、文化や習慣をきちんと理解することが重要であるとの現地調査で学び、その姿勢でこれからの仕事に取り組みたい。

## ■ 今後本プログラムを希望する方へのアドバイス

### 1. 現地調査に正解はない

私は今回ラオス、ベトナム、ミャンマーに渡航するにあたり、現地に知り合いが一人もおらず頼れる方がいなかったため、渡航前は自身の考えた計画で本当に大丈夫なのか、自分一人でやっていけるのか、お金を無駄にしまわぬか等本当に悩んだ。現地調査に正解というものはなく、自分自身がなにかこの調査で学ぶものがあれば、それで十分と何度も言い聞かしたが、それでも本当に不安でいっぱいだった。もし、「自分なんかで現地調査なんてできるはずがない」と応募に渋っている方がいたら、私もそうだったと声を大にして言いたい。現地調査をしたことがある人なんて本当にごくわずかだと考えるし、自身が興味ある国につてがある人も限られていると思う。現地調査をするにあたり、いろいろなアプローチの仕方があると思うので、自分らしい現地調査を計画してほしい。

### 2. インタビュー調査は必須

その土地を歩くだけで、どんなものをいくらで得られるのか、来ている服はどんなもので中心地と郊外の暮らしの差はなんなのか等を知ることができるため、一人でその国の交通機関を利用しながらまわることも非常に勉強になることが多い。しかし、実際に現地で暮らしている方の意見はその国の表面だけではない裏側の情報まで知ることができる。私も報告書には載せきることのできない量の情報を今回の調査で得た。現地調査へチャレンジする方は、ぜひ現地の方、もしくは現地の人とともに暮らしたり、仕事をする日本人の方にお話を聞くととても興味深い情報を得られると思う。

(私はネイティブレベルで話せる外国語がないので、現地の言葉が堪能な日本人の方々、日本語を学ぶ現地の方にお話を伺った。)

### 3. 予定外のことが起きるのは当たり前、そのことを念頭に

私は、行きの飛行機で2つの航空会社を利用してラオスへ行く予定だったが、トランジット先のハノイでトラブルが起き、何人もの職員にたらいまわしにされ、結局2時間待たされることになった。またホテルでは、“君の部屋に問題があって今日は泊まれないので明日から来てください”と言われてたり、予定していた飛行機が2度スケジュール変更したり、、コロナウイルスの影響で帰りの便も欠航し旅行会社に勤める白川さんの勧めで、前倒しの帰国をすることになったりもした。日本ではあまり起きないことも海外では日常茶飯事であったりもする。トラブルに巻き込まれないことが1番だが、こういうことが起きるかもしれない、と事前に起こりうるトラブルについて調べておくとよいかもしれない。